

報告 海辺の環境教育ゆるふわフォーラム

大堀 健司（エコツアーふくみみ）

キーワード：海辺、フォーラム、対面、自然体験

1. はじめに

2023年4月、石垣島において『海辺の環境教育ゆるふわフォーラム』が開催された。海辺の環境教育フォーラム、通称「海辺フォーラム」は海の環境教育に関心がある有志が集うゆるやかなネットワーク（参照：<https://umibef.com/>）。2001年から2019年までに全国各地で14回のミーティングが開催され、2020年からはオンラインミーティングも行われている。

筆者はこれまで3回の海辺フォーラムの開催に関わることができ得難い経験を積むことができた。その一方でフォーラム開催に向けての準備や当日の運営など、主催者側の困難さを知ることもできた。そこで主催者がほとんど何も準備しないで当日を迎える「ゆるふわ」形式のミーティングを実験的に計画し開催してみた。オンラインミーティングが一般的になった今、対面で集まる際のひとつの手段として提案したい。

2. ゆる一く告知

海辺の環境教育ゆるふわフォーラム（以下、海辺ゆるふわ）の告知は主催者である筆者が手書きした一枚の紙だけで行った。これには大まかな日時と場所と、参加費が無料であること、宿泊は自分で手配すること、申し込めるのは自分が海辺フォーラム関係者であると思っている人（これまでの海辺フォーラムを全く知らない人の参加はお互いにハードルが高すぎるため）、そして決まったスケジュールがないことだけが書かれている。募集定員は30名とした。これは会場が筆者の自宅であったことと、実験的な開催であったことから設定した。それでも30名も来たらどうしようかという多少の不安はぬぐえなかった。

3. 申し込みから前日まで

申し込み者にはLINEグループを案内し、飛行機の到着時間や宿泊場所、レンタカーのシェアなどの情報をやり取りしてもらった。あれ食べたいこれ食べたいなど生活面の話題については散発的に盛り上がったが、ゆるふわフォーラム中の細かいスケジュールについては頑なに決めなかった。

最終的な参加者は大人18名、幼児4人。瞬間的に小学生も1人。大人の年齢は30代から60代まで。久しぶりに会う参加者もいればオンラインだけの知り合いもいる。フォーラムの開催は4月14日（金）から17日（月）までの4日間。その期間内であればいつ来てもいつ帰っても自由。14日に石垣島に到着する参加者が多く、前日のLINEグループは大盛り上がり。久しぶりの旅行、久しぶりの対面でのミーティングに興奮している様子が伺えた。荷造りしているがあれがないこれがない、などの投稿が延々と続いたため「もう早く寝なさい」とたしなめると静かになった。

4. ふわっと分科会

思い思いの時間に到着する参加者。ある程度集まったところで開会式。所要時間2分。初日はとにかく懇親会。各地のお土産をいただきながら、自己紹介したり近況を報告したり、この懇親会のみで帰った参加者もいた。

そして二日目。この日はサンゴ礁観察しようかと前日に話していたが、寒冷前線の通過が予想されたので海岸の散策をすることに。もともとスケジュールはないので臨機応変に対応できることもゆるふわ形式の利点。特徴的な地形の海岸をみんなで歩き、全線通過に伴い雷雨となったため洞窟に一時避難。待機中に自然にアクティビティが始まるのは、環境教育のプロが多数いるから。雨が上がって午後は、環境に配慮した魚屋に見学を兼ねて買い出しに行くチームと、残って参加者の一人が用意してくれていた貝殻磨きアクティビティとリクエストに応じて筆者による「環世界曼荼羅」体験。三日目も待望のサンゴ礁シュノーケリング、赤土流出実験、地質巡検、海草やホタルの観察などの分科会が進行。ふわっと突然始まる分科会で普通に環境教育フォーラムっぽく進むことに参加者驚愕。

5. 閉会、そして感想

参加者がいつ帰るのかを正しく把握していないため、気がつくとだんだんと人が減っていくのはやや淋しかった。最終日は残った参加者で海岸清掃分科会ののち20秒の閉会式で全日程終了。

以下、参加者の感想。

「子連れで参加でき、久しぶりの刺激となりました」

「自然体験の経験値が増えました！」

「子連れでもご一緒できて嬉しかったです！」

「子ども達の声が聞こえる楽しいフォーラムでした。お互いのペースに合わせて行ったり来たりする雰囲気がとても良かった」

「ゆるゆるなのに気付くこと学ぶことたくさん」

「やはり現地へ行くことで感じられることは大きい」

「現地に行って体験して初めて心底分かることがある」

「知識でわかっている、やはり分かり得ないものがあるんだなあ…と。現地体験の大切さを再認識」

「コロナで外出が減って生き物や自然と触れ合う時間も減っていたので、これからまた少しずつ、自然に会いに行く時間を増やそうと思いました」

「（自分の地域）ではどんな風にできるかな～、次はどんなことしようかな～やってみようかな～と、いろんな場面で思うことができました」

「オンラインでは拾えない参加者の皆さんからのポツと出た言葉が、それぞれに取って重要な言葉になったりする」

「子供を、ましてや乳飲み子を連れての参加も、ややハードル高めかなと思いきや、自由に行動出来て、参加できる時にだけ参加する！ゆるふわフォーラムの寛容さが、参加へのハードルをグン！と下げたくれた」

「2年のオンラインフォーラムを一緒に動かしてくれた仲間と初めてリアルで会って、わいわいと話ができて、何はなくともまずはみんなと会えたことがほんとうに嬉しかった」

「いろんな分野のプロがいて、あちらこちらで勝手に分科会やプチ講座が始まり、今までただただ、好きー！キレー！すごーい！と思っていた風景や生き物が一気にストーリーとってより偉大さや愛着を感じることができました」

「事前に予定がきっちりわかっていないと不安で、最初はかなりドキドキしていましたが、LINEのやりとりを見ているうちにそうした心配は薄れ、フォーラムが始まってからは、こういう大まかなプランで動くのこそ自由でいいなと思いました。それと同時に、そうした大まかなプランでも動けるのは、詳細なプランを思い描ける方がいるからこそなんだよなということも実感しました」

「準備にエネルギーを費やすこれまでのフォーラムは、たくさん参加者と海や環境教育に興味を持ち始めた新しい人を集めることができるが気軽には開催できない。なので準備を全くしない集まりをしてみたい。これだけのプロフェッショナルがいる海辺フォーラム関係者なら、集まってからあれしよこれしよでなんとでもなるはず、ということが当初の目的でそれは達成できたと思う。この手法でもっとゆるやかに各地でゆるふわフォーラムを開催し、たまに大きなしつかりとした海辺フォーラムを開催するのがよいのかなということを示せた。そして、オンラインが当たり前になったコロナ禍を経て、やっぱり直接会うのっていいよね。得られる情報量が違うよね。ってみなさん感じたかと思います。私も想像していたより強く感じました」

6. さいごに

オンラインミーティングでより自由に人のつながりが確保されるようになった今こそ、直接会う機会をもっと気軽に作るべきであるとする。そのひとつの手段としてゆるふわ形式のミーティングを提案したい。

